

大学受験指導と記号付け

1 はじめに～単語力をどうするか～

今年3年生担当ということで、個人的に放課後、希望者に対して受験のための課外を実施してきた。基本的に長文読解を扱い、「記号付け」を伝授することを中心に指導してきた。毎日2つか3つの長文問題を読んでいったのだが、最初は単語力の無さに愕然とさせられた。しかし、これは毎日継続して入試レベルの長文を読んでいき、同じ単語に2日おき位に出会うことが体験的に分かってくると、生徒も私もさほど気にならなくなった。繰り返し出会うことで、生徒の定着が良くなって来るからだ。(もちろん、その日出てきた単語はノートやカードに書かせて暗記の努力はさせたが)この感覚は週に一度くらい1つの長文を読む課外では絶対に味わうことのない感覚であると思われる。こうして3ヶ月ぐらいたがると単語の未知数が格段に減り長文を読むのがあまり苦ではなくなってきたように思えた。単語を覚えさせるコツは毎日長文を一定量読ませることだと改めて気づかされた。

2 入試レベルの長文の記号付けで生徒がぶつかる共通点。

入試レベルの長文に生徒が記号付けをしていくと間違ふところが共通していることに気づいたので紹介したい。逆に言えばこの点以外は文の構造をつかめないということはあまりなかったということだ。(ここでの文とは一文、一文の意)記号付けは生徒がどこでつまづくかが見えるレントゲン写真のようなもので、生徒の頭の中を覗ける、教師にとっては素晴らしい道具である。

なお生徒がつける記号は動詞に○、連結詞に□、関係詞を〔 〕でくり出す。分詞の後置修飾を〔 〕でくるとし、必要があれば、前置詞句も〔 〕でくり準動詞には右半○をつけることとした。

2-1 関係代名詞の省略

関係代名詞節はまず大きくその節全体を〔 〕でくくる。どこからどこまでがその節なのか気が付かなくてはならない。スラッシュを入れて前からのつながりとして読むのではなく、まず全体を〔 〕でくくって挿入としてとらえる感覚がなくては入試レベルでは読み解くのが難しい。〔 〕が長いからだ。

このとき〔 〕の終わりを見つけるのが難しい場合ももちろん多いが、それよりも関係代名詞が省略されていると、その始まりに気が付かない生徒が多いようだ。

セン セン (マル)、 名詞 名詞 (動詞) の並びがあつたら、「関係代名詞の省略」であるということ繰り返し言うことが多かった。

例)

Some (insists) that ends [they believe to be good] (can justify) means [they know quite certainly to be abominable] .

ends they believe のところと、 means they know のところが気が付けば
結構、構造は分かりやすい。

2-2 過去形か過去分詞か

生徒の記号付けを見て、次に気が付くことは動詞の過去分詞を○で囲んでしまうことだ。
特に過去形と過去分詞が同じ形の場合だ。過去分詞の後置修飾をしっかり教えた後、
セン (マル) [前] の形になっていたら、(マル) の後ろに目的語がない
場合、それは過去分詞の後置修飾を疑うべき、つまりセン [右半マル] 前]
の形を考えるべきだということを教える必要が何度もあった。

例) The process [involved in this reaction] (is) much more complicated.

上の involved を○で囲んでしまう生徒が多い。involved が動詞なら後に目的語がなく
ては意味をなさない。これも関係代名詞同様 [] で大きく囲ませ挿入として教え
ることが必要である。

2-3 [前置詞句] が形容詞のように使われるとき

副詞的に場所や時をあらわす場合は問題はあまりないようだが、「前にある名詞を後置
修飾する場合」を苦手とする生徒が多いようだ。この場合記号は付けられるが、意味が分
からないという生徒が多いので、特に指導が必要である。

例) The women [in cotton dresses] を 女性達 / 綿のドレスの中で / と副詞的
に訳してしまう生徒が多い。後から修飾する形を意識させておかないと気が付かな
い様子だ。

2-4 (動詞) A [前 B] でAの部分が長い場合、前置詞と動詞が結びつかない

動詞の部分の熟語と呼ばれるもののうち、中学の時のものの多くは look at ,listen to の
ように動詞と前置詞が隣合わせであった。しかし高校で習うものの多くは,prevent A from B
のように動詞と前置詞の間に語句が入る場合がほとんどである。そのためこのAの部分が
長いと、特にAの部分に別の前置詞句まで含まれていると、せっかく後に続く熟語の一部
である前置詞句に記号がつけられても (つまり [前 B] の部分) 動詞と結びつけられな
くなってしまふようだ。逆に動詞に○をつけた時点で、熟語として後に続く前置詞を探し
ながら読めるように指導する必要がある。

例) I (regret) to say that I (am prevented) by unavoidable circumstances [from attending
today's meeting]

(後で知ったことだが、prevent は from を省略することがしばしばあり、例としては適切でないようだ。)

3 記号付けなら後置修飾を挿入として捉えることはむしろ自然

2-1 から 2-3 において共通していえることは、生徒が記号付けでつまづくのは「英語の後置修飾」の部分であるということだ。この3点において受験レベルを教える場合は生徒に形をパターンとして事前に意識させておいた方が効率てきだと思われる。特に下記のように述語動詞前に後置修飾がある場合を共通に苦手としているようだ。

_____ [_____] (_____) _____

下記のように述語動詞より後にある場合は生徒はセン (マル) セン 本能的に一度区切って訳す生徒が多く、それほど問題はないようだ。

_____ (_____) _____ [_____]

しかし先の述語動詞の前に後置修飾がある場合、頭からフレーズごとに訳すのに、[_____] が後置修飾であり、「挿入」であると認識できないとフレーズ訳を考えるのが難しいようだ。ただその点では記号付けはスラッシュを入れるより、自然に文構造が浮き彫りになり、括弧という記号も「挿入」を連想させるのが簡単で分かりやすいと好評であった。おそらく中レベルの生徒達がスラッシュリーディングで一番負担がかかる文の形でないだろうか？

4 熟語指導

また 2-4 の熟語の指導であるが、記号研の筋からは外れると思われるが、「prevent がきたら from を探せ」はやはり受験生には必要な知識であると思う。prevent A from B の B が prevent から離れれば離れるほど記号は付けられるが意味がとれない生徒が出てきたことからそう実感している。熟語を長文の中で覚えさせるにも有効な手段であると思われる、同じことが so ~ that 構文などでも何度も実感させられたこともあげておきたい。確かに前置詞の原義から意味はとれるかもしれないが、それは暗記の手助けと未知の熟語を類推する際の手助けと考えるほうが、目の前の受験生には正直現実的ではないだろうか？

5 グラトラは必要？ ～全て頭から読むなんて無理～

もう一つ、記号をつけながら長文を読むときの利点は集中力が増すということをおあげたい。手で作業を入れることで周りの少々の雑音は気にならないくらい集中できるようだ。さらに記号を入れることをスラッシュの代わりと考えてスラッシュリーディングのように頭からどんどん読んでいくこともできるし、文構造もしっかり捉えて読んでいけるので、（ここでの文とは一文、一文のこと）難解な文の場合は後戻りして訳読式に読むことも出来るので非常に便利だ。（大学入試問題の説明文を頭からどんどん読んでいける教師がどれだけいるのだろうか？少なくとも私は課外で扱った入試の英文の中でさえ、読み返しをしなくては意味のとれない文に何度も出会った。まして問題を解くとなると誰でもやるのではないだろうか？）グラトラとスラッシュリーディング両方の利点を兼ねているのが記号付けである。

6 入試問題は難しい

しかしながら、全文訳がとれても読めたことにはならないということ、問題が解けるとは限らないということを残念ながら今回痛感させられた。パラグラフの仕組み、特にディスコースマーカークレームの見つけ方は指導しないと、明治ぐらいの問題になると訳しただけでは問題が解けないと感じるものが多かった。訳せたからといって意味が分かるかというところではなく、パラグラフごとに何を言いたいのか、この文はそれを言うためにどんな役目をしているのかまで考えないと頭に残らないし、問題も解けないようだ。文章を「読みとる」のは奥が深いと入試問題を指導して痛感した。（進学校・受験校で『学力』での「読みとり指導」の追試が必要であると思われる。）

7 さいごに

以上長文読解指導についてを述べてきたが、本校レベルの生徒にとってもう一つ難しいのが「並べ替え問題」である。これに対しては6年前に岐阜の谷口先生から教わったものがおおいに役立っているのでここに記しておきたい。先生からはヒントとして「記号・相性・予測」の3つを合い言葉にしているといことだけを聞いて、時間がなくてその具体例を聞けないままだったが、帰ってきてから自分なりにまとめて（機関誌 号）、その方法でずっと教えている。結果は良好で生徒にも受け入れられ、センターでも英検2級の試験でも課外参加者のこの分野の正解率は高かった。

「記号研は底辺校向き」いう先生方も多いようだが（この前高教研関東ブロックで筑波大の某先生も「底辺校」で人気と言っていた）、大学入試対策にも記号付けは非常に有効であり、受験対策用の長文問題集も是非会員間で取り組んでいくべきだと強く訴えたい。そう思いこのレポートを書いたのが本当のところである。

今後の読みの指導としては記号研では大西忠治の文書全体の「構造読み」の追試を進めてきたが、1つ1つのパラグラフにおける構造を見抜くことも非常に大切であると思われる。この力がないと一定レベル以上の入試問題は解けないことに気づいたからだ。「連続」と「切れ」の2分法等、このことに関しては寺島先生の『英語にとって学力とは何か』第3章に詳しいのでこの分野の研究を会員間で是非取り組んでいけたらと思う。20年以上

も前の論文でこれほどパラグラフリーディングについて研究されていたとは本当に驚いてしまう。また最近東京外語大の金谷先生が「和訳先渡し」で注目を浴びているが、寺島先生は20年以上も前に実践されて、その効用に言及されていることにも本当に驚かされる。そして12年もこの本を持っているのに宝の持ち腐れにしている自分に再びあきれてしまう。

入試問題を解くために「読みとり」の指導をするとは順序があべこべかもしれないが、文章を構造的に読むことは文章を構造的に書くことにもつながる極めて重要なことだと思われる。生徒とともに入試問題を解いてきたが、私自身いろいろなことを学ぶことができ有意義な1年であった。